

岐路に立つ地方自治体と図書館経営（Ⅱ）

— 福島県矢祭町と島根県海士町の場合 —

野 口 武 悟

1. はじめに

筆者は、本年報の前号に掲載した拙稿「岐路に立つ地方自治体と図書館経営（Ⅰ）—北海道夕張市の場合—」において、財政破綻に至ってしまった北海道夕張市の図書館経営の現状と課題を考察した¹⁾。今日、夕張市のように財政破綻に至らなくても、財政的に厳しい地方自治体は多く、合併や行財政改革が推し進められている。その一環として、公立図書館の運営予算を削減したり、運営方式を直営から指定管理者やPFIなどに切り替える（アウトソーシングする）地方自治体は少なくない。財政的な厳しさは、当然、公立図書館の新規設置の抑制にもつながっている。

こうしたなかで、従来には見られなかったユニークな発想と手法で、新規に図書館を設置、運営したり、図書館活動の振興に取り組む地方自治体が現れ、マスメディアでも報道されるなど注目を集めている。福島県矢祭町の「矢祭もったいない図書館」と島根県海士町の「島まるごと図書館」である。はたして、これら両町での取り組みは、どのような現状にあり、そこから見えてくる経営上の可能性と課題は如何なるものであろうか。

そこで、本研究では、上記の矢祭町と海士町の図書館経営について文献調査及び現地調査を行うこととした。現地調査は、矢祭町については2009年8月26日に「矢祭もったいない図書館」を訪問し、館長の金澤昭氏、司書の下重淳子氏に聞き取りを行った。また、海士町については2009年9月9日に海士町教育委員会、海士町中央公民館図書室などを訪問し、教育長の佃稔氏、学校教育課長代理の宮岡健二氏、司書の磯谷奈緒子氏に聞き取りを行っ

た（以下、本文中では各氏の敬称略）。本稿では、以上の調査結果から、矢祭町と海士町の図書館経営の実際を明らかにするとともに、そこから見えてくる経営上の可能性と課題を考察したい。

2. 福島県矢祭町「矢祭もったいない図書館」

2.1 矢祭町の沿革と現況

福島県矢祭町は、福島県の南部に位置する（図1）。町内には一級河川の久慈川が流れ、また、東に阿武隈山系、西に八溝山系が連なる風光明媚な農山村地帯である。町内には福島県の郡山市と茨城県の県庁所在地である水戸市を結ぶ JR 水郡線が通り、町の中心駅である東館駅までは郡山駅、水戸駅どちらからも約 90 分で着くことができる。人口は、2009 年 12 月現在で 6,681 人である²⁾ が、漸減傾向にある。



図1 福島県矢祭町の位置

矢祭町は、1955年3月に豊里村と高城村の南部が合併して矢祭村として成立した。その後、埴町の一部を編入し、1963年1月に町制施行し現在に至っている³⁾。根本良一前町長の町政時代の2001年10月、「市町村合併をしない矢祭町宣言」を町議会で議決したことによって、矢祭町は全国に大きなインパクトを持って知られることになった。同宣言は、「(前略)市町村は戦後半世紀を経て、地域に根ざした基礎的な地方自治体として成熟し、自らの進路の決定は自己責任のもと意思決定をする能力を十分に持っております。地方自治の本旨に基づき、矢祭町議会は国が押し付ける市町村合併には賛意できず、先人から享けた郷土「矢祭町」を21世紀に生きる子孫にそっくり引き継ぐことが、今、この時、ここに生きる私達の使命であり、将来に禍根を残す選択はすべきでない」と判断いたします。(後略)」との考えのもとに宣言された「1. 矢祭町は今日まで「合併」を前提とした町づくりはしてきておらず、独立独歩「自立できる町づくり」を推進する。」などの6項目から成るものである⁴⁾。

この宣言を受けて、矢祭町は町民の協力のもと、行財政改革を積極的に推進している。例えば、築45年以上になる町役場庁舎をそのまま利用し、「行革のシンボル」⁵⁾としている。また、職員数の削減を進める一方、それが町民に対する行政サービスの低下につながらないように、役場窓口の業務にフレックスタイムを導入して7時半から18時45分まで開庁する、土日も日直者2名が窓口対応し平日と同じサービスを提供する(事実上、年中無休)、職員の自宅を出張役場と位置づけて税金や水道料金等の収納対応をする⁶⁾など、斬新な試みを行っている。2007年4月には根本前町長が引退し、古張允が新たに町長になった。古張町長は根本町政の方針を引き継ぎ、行財政改革のさらなる推進へ向けての試行錯誤を続けている。2009年2月には町役場の窓口業務を「一般社団法人やまつき公共サービス」(通称、第2役場)に大幅に委託する計画が明らかになった⁷⁾が、町議会の反対で実施が見送られる⁸⁾ということもあった。町議会自らが改革に積極的で、2002年9月には議員定数を18人から10人に削減し、2007年12月には矢祭町議会決意宣言「町民とともに立たん」を発して、議員報酬を日当制に改めている。同宣言では、「報酬を日当制に変更するという大胆な決断によって、すべての地方

議員に対して、自身の立ち位置とあるべき姿を改めて問い直し、警鐘を乱打するものである。」と述べている⁹⁾。このような行財政改革を進める矢祭町は、行財政改革の先進地としてマスメディアで取り上げられるだけではなく、全国各地の地方自治体から連日のように視察者が訪れている。

では、こうした改革を町民はどう見ているのだろうか。朝日新聞が 2006 年に行った調査では、自立の町づくりを評価するとした町民は 78%、行政の効率運営について努力しているとした町民は 77%であったという¹⁰⁾。上述した一連の行政の取り組みは、町民からも高い支持を得ていることが窺われる。

2.2 「矢祭もったいない図書館」の開館までのプロセス

矢祭町には、2007 年 1 月に「矢祭もったいない図書館」が開館するまで、町立図書館は設置されていなかった。上述してきたような行財政改革を進めている状況からして、新規の図書館設置は困難と誰もが考えてしまうところであろう。ところが、矢祭町は、2005 年に図書館の設置に向けて動き出すことになった。その契機は、同年に町の第 3 次総合計画策定のために町民にアンケートを行ったところ、「町立図書館の早期開設」を求める要望が大多数となったことにある¹¹⁾。「矢祭もったいない図書館」の金澤昭館長は、筆者の聞き取りに「町内には書店もないので、本に触れる所がほしかった」のだと語っている。当時、町内には、公共の読書施設がまったくなかったわけではなく、中央公民館と山村開発センターに図書室が設けられており、町民の利用に供されていた。ただし、蔵書冊数は両図書室合わせても 9,000 冊程度であったというから必ずしも町民のニーズに応え得る施設とはなっていなかったものと推察できる。

町民からの要望を受けて、町当局は検討を開始する。まず、建物については、「町職員から、既存の建物を改築すれば、少ない予算で可能ではないかとの提案があり、武道館を、地域開放型交流施設として整備し、図書館にすることに決定」¹²⁾したのであった。金澤館長によると、中学校に武道場が新設され町民もそこを利用できるようにすることによって、武道館が転用可能になったということであった。こうして、2006 年 7 月に武道館の改築工事が

着工され、2007年1月に竣工した。事業費は3億3564万8000円であった。

次に、建物があっても、蔵書がないことには図書館は成立しない。既存の9,000冊程度の蔵書では不十分であり、最低でも3~4万冊は揃えたいと当初は考えていたようである¹³⁾。しかし、図書購入費の確保は厳しいというのが町の実状であった。こうした状況にあって、2006年6月、福島市内で開かれた会合で町の自立課の職員が図書館づくりに関する取り組みを講演したところ、その会合に参加していた毎日新聞社福島支局長から全国に図書の寄贈を呼びかけてはどうかとの提案があった¹⁴⁾。これを受けて、同年7月18日付の毎日新聞の全国版で矢祭町への図書寄贈を呼びかける記事が掲載され、1日で380件もの問い合わせが寄せられたという¹⁵⁾。追って他のメディアも報道するようになり、全国的に大きな反響を呼ぶことになった。1か月後の8月中旬には、当初の目標を超える5万冊が寄贈され¹⁶⁾、1年後の2007年8月には40万冊を超えるに至った¹⁷⁾。こうして蔵書のほとんどを寄贈図書で構築するというユニークな図書館が実現することになったのである。

建物と蔵書が揃っても、図書館を運営する人材がいらないことには、やはり図書館は成り立たない。人材に関しても、職員の削減を進めている町としては、職員を図書館にまわすのは現実的ではない。この点に関しては、町民の力を借りることで対応することになり、2006年7月に「パートナーシップで創りあげる新しい図書館づくり」検討会を開催し、続いて、43人の町民ボランティアから成る「図書館開設準備委員会」を立ち上げた。「図書館開設準備委員会」は、さっそく寄贈図書の整理、分類作業等に着手した。ところが、いくつかの問題に直面することになる。ひとつは、整理、分類作業を行うにも、「図書館開設準備委員会」のメンバーには司書の資格を持つ者は1人しかおらず、多くのメンバーが図書館における図書の分類法である日本十進分類法（NDC）にも不慣れという状況にあることであった。効率的に作業を行うにはメンバーがNDCを理解している必要がある。そこで、福島県立図書館に協力を求め、同館の職員の指導を受けながらNDCを会得していったという¹⁸⁾。もうひとつは、寄贈図書が予想外に多く届いたため、作業の人手が足りないという問題であった。これに対して、町商工会婦人部・青年部、町婦人会、農協婦人部、保育所や幼稚園の教職員などが手弁当で手伝ってくれ

るようになり、まさに町民挙げての作業になっていた。初代館長となった齊藤守保は「素晴らしい町民力と町民の奉仕の心に、改めて感銘しました」と述べている¹⁹⁾。開館まで2か月と迫った2006年11月には町役場の職員も総動員で作業が進められた。こうして12月28日には分類の終わった図書の館内への排架も終え、「図書館開設準備委員会」は解散となった。翌2007年1月9日には、「図書館開設準備委員会」のメンバーらを母体に新たに「矢祭もったいない図書館管理運営委員会」（以下、運営委員会とする）が発足、運営委員会が指定管理者となって開館後の図書館の運営に当たることになった。

以上のプロセスを経て、2007年1月14日、「矢祭もったいない図書館」が開館した。

2.3 「矢祭もったいない図書館」の実際

「矢祭もったいない図書館」は、町の中心駅であるJR東館駅の近くにある。武道館を改築した開架一般閲覧室（432㎡）と、新築した閉架書庫（1階373.36㎡、2階272.75㎡）から成る（図2～図6）。同館は、図書館法に基づく公立図書館であり、同法第10条の規定により町が定めた「矢祭もったいない図書館設置及び管理に関する条例」に基づいて設置、運営されている。指定管理者による運営方式を採用しており、指定管理者は上述した運営委員会（現在の委員は14人）となっている。委員14人で役割分担をして図書館業務に当たっている（図7）。2009年度の運営方針には、「図書館はみんなの情報基地」をモットーに、資料の合理的な収集、関係機関との連携など、サービス体制の充実強化に努める。多様化する利用者の要求に適切敏速に対応し、生涯学習の中核に果たす機関として、図書館サービスの充実に努める」との努力目標が示されている。2009年度の図書館運営予算は約780万円であるが、その大半は運営委員会の人件費である。運営委員会の委員には、「矢祭もったいない図書館管理運営委員会設置要綱」第6条に基づき、1時間当たり500円が支払われている。なお、「矢祭もったいない図書館」本館のほかに、「矢祭町読書の日」制定に関する規則」第3条に基づき、町内26か所（各地区の集会所など）に「矢祭もったいない文庫」が設置されている。同規則第4条で、この文庫も「矢祭もったいない図書館」の指定管理者であ



図2 「矢祭もったいない図書館」の入口



図3 「矢祭もったいない図書館」のカウンター

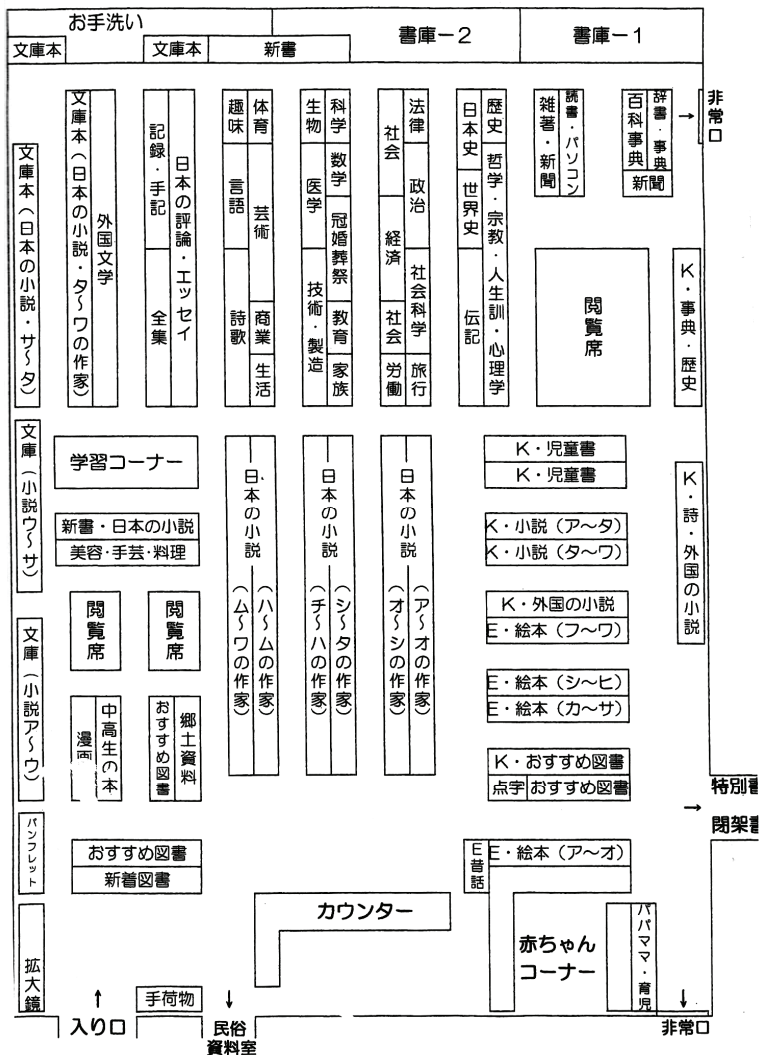


図4 「矢祭もったいない図書館」の館内



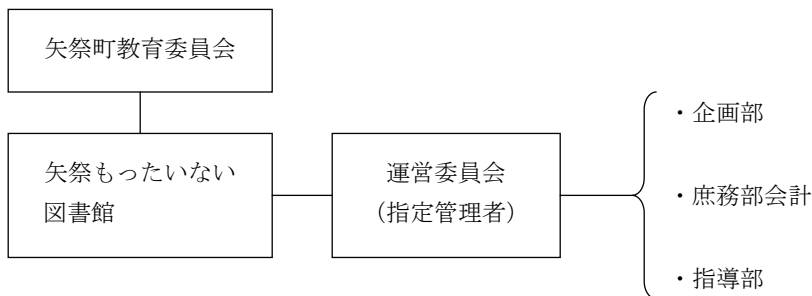
図5 「矢祭もったいない図書館」の閉架書庫

館 内 図



出典：矢祭もったいない図書館『平成 21 年度矢祭もったいない図書館要覧』、2009 年、p.7.

図 6 「矢祭もったいない図書館」館内図



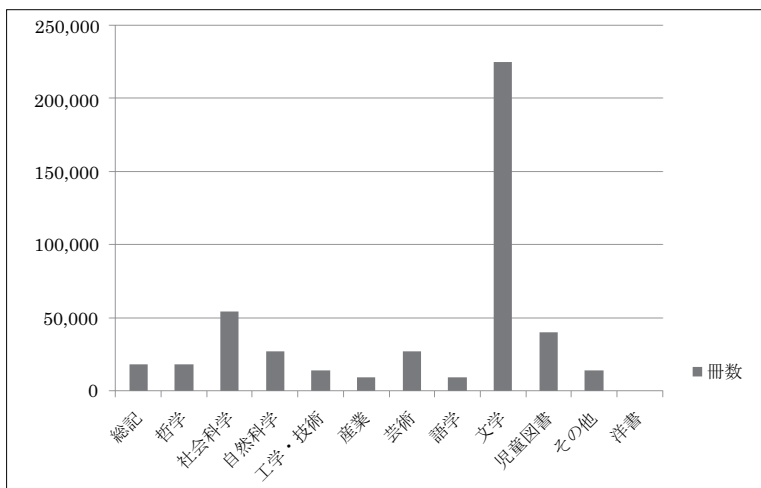
出典：矢祭もったいない図書館『平成 21 年度矢祭もったいない図書館要覧』，
2009 年，p.5.

図 7 「矢祭もったいない図書館」の運営機構

る運営委員会が管理運営すると定められており、事実上、「矢祭もったいない図書館」の分館に相当するものといえる。

2009 年 8 月時点での蔵書冊数は、約 445,000 冊であり、開架書架に 60,000 冊、閉架書庫に 370,000 冊、町内 26 か所の「矢祭もったいない文庫」に 15,000 冊となっている。蔵書冊数では、福島県内 3 番目の規模となっている。蔵書構成別内訳は、図 8 に示す通りである。蔵書のほとんどすべてが寄贈図書ということもあり、訪問前の筆者は古びた図書ばかりが並んでいるのだらうと想像していたのだが、実際に見てみると比較的新しい図書が多く意外であった。ただし、金澤館長は、新刊の図書をどう入れていくかが大きな課題であると話していた。図書購入に使える予算がないので、児童図書と、それ以外の図書は発行後 3 年以内のもののみ、現在も寄贈を受け入れているという（それ以外の寄贈の受け入れは 40 万冊を超えた 2007 年 8 月で停止）。また、寄贈された蔵書には重複も少なくないので、「矢祭もったいない文庫」や学校図書館でも積極的に利用していくという。このほか、新聞を数紙受け入れているが、これは町役場で購読しているものを午後から図書館に持ってきて閲覧に供している。

「矢祭もったいない図書館」は、火曜から日曜までの午前 9 時から午後 6 時まで開館している（月曜は休館日）。貸出冊数と期間は、1 人 5 冊まで 2 週間となっている。開館当初はカード式（ブラウン式）で貸出手続きを行っ

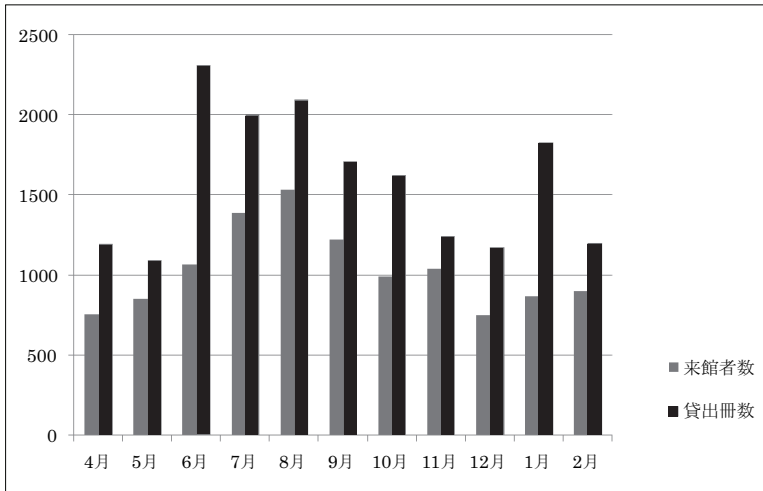


出典：矢祭もったいない図書館『平成 21 年度矢祭もったいない図書館要覧』、2009 年、p.3 をもとに作成

図 8 「矢祭もったいない図書館」の蔵書構成

ていたが、2007 年 4 月からはコンピュータ式²⁰⁾に変更された。延べ来館者数は、2007 年 10 月に 1 万人、2008 年 8 月に 2 万人を超え、2009 年 7 月には 3 万人を超えた。2008 年度の利用状況は、図 9 の通りである。2009 年 8 月現在での利用登録者数は 1,988 人（うち、町民 1,311 人、町外 677 人）である。町の総人口に占める町民の登録率は約 20% である。金澤館長は、登録率をさらに高め、より多くの町民に利用してもらうことも課題であると話していた。特徴的なのは、町外の登録者が全登録者の 3 分の 1 を占めることであろう。全国からの寄贈によって出来た図書館なので、全国の人に利用してもらえるようにしていると金澤館長は話していた。町外の登録者は寄贈者が多いようである。町外の登録者のために 2008 年 6 月からは郵送による遠隔地貸出宅配サービスを行っている。

図書館サービス、図書館活動としては、レファレンス、児童サービスなど他の公立図書館と同様のサービスや活動が行われている。ユニークな活動としては、「家読^{うちどく}」の推進や「子ども司書」制度の創設が挙げられよう。「家読



出典：矢祭もったいない図書館『平成 21 年度矢祭もったいない図書館要覧』、2009 年、p.9 をもとに作成

図 9 「矢祭もったいない図書館」の 2008 年度の利用状況

とは、家族みんなで同じ本を読み、家族の絆やコミュニケーションを深めることをねらいとした新たな読書習慣の形成を目指すもので「読書の町矢祭宣言」において提唱されたものである。この宣言は、2007 年 10 月に発表され、「家読」を推進するために、上述した「矢祭もったいない文庫」の設置や、毎月第 3 日曜日を「矢祭町読書の日」に定めるなどの取り組みを行うことになった。「矢祭もったいない図書館」も館内に「うちどくコーナー」を設けている。「子ども司書」制度は、2009 年度から文部科学省の「子ども読書の街づくり推進事業」を受託して始められたものである。「子ども司書」は、町独自の制度で、町内の小学 4 年から 6 年の児童が次の条件を満たした場合に認定される仕組みである。すなわち、(1)「子ども司書」に関する全 15 講座(表 1)に参加し 12 単位以上を取得、(2)講座期間中に自分が読んだ本の感想と、講座を学んでの感想を、400 字以内にまとめて提出、(3)前記の(1)及び(2)ともにクリアした者を「子ども司書」に認定する、という仕組みである。今次の講座は 2009 年 6 月から 2010 年 1 月の期間で開講され、14 人の

表1 「子ども司書」講座のカリキュラム

月 日	講座内容	単位
6月20日	開講式・オリエンテーション	1
7月12日	ジュニア俳句スクール in 矢祭	1
7月18日	手づくり絵本教室	1
7月24日	日本十進分類法（NDC）による図書の分類と配架について	1
7月26日	視察研修旅行 ①宇都宮市立図書館 ②なかがわ水遊園 ③いわむらかずお絵本の丘美術館	1
7月31日	図書の保管と修理について	1
8月8日	おはなし会への参加	1
8月11日	図書の検索、受付・登録・貸出と返却について	1
9月5日	パソコン講座（ブラインドタッチによるキーボード文字入力）	1
10月3日	パソコン講座（バーコードの仕組みと利用について）	1
11月1日	ジュニア俳句スクール	1
冬休み期間	読み聞かせのための選書について 読み聞かせの技能について（実技）	2
1月9日	読み聞かせの技能について（発表）	1
1月30日	閉講式・認定書授与	1

出典：矢祭町教育委員会「「矢祭子ども司書」講座開催要項」，2009年をもとに作成

児童が受講している。そもそも、「子ども司書」制度は、学校の図書委員の研修や図書館ボランティアの養成を目的とするものではない。「友達や家族に対して読書のすばらしさを伝え、本と人との結びつきを手助けするリーダー養成を図ることを目的」（講座開催要項）とするものである。このほか、「子ども読書の街づくり推進事業」では、「矢祭もったいない図書館」、「矢祭もったいない文庫」、町内全小、中学校の学校図書館の蔵書データをコンピュータ検索できる総合目録の構築にも着手しており、2011年度からは給食配送車を活用して各図書館間の図書の相互貸借を行う計画も立てられている。

他機関等との関わりとしては、福島県立図書館が毎月1回巡回来館し、未所蔵資料を借り受けている。また、学校図書館とは、前述したような計画があるほか、2009年度から「矢祭もったいない図書館」の運営委員会委員が全



図 10 「矢祭もったいない図書館」のキャラバンカー

小学校に週 6 時間訪問し、蔵書の整理等を行うようになった。町内の小、中学校には司書教諭も学校司書も配置されておらず、蔵書が分類されていない、目録が作成されていない、蔵書の損傷が激しいなどの状況にあったという。ボランティア団体との関わりでは、「矢祭もったいない図書館」開館前から読み聞かせボランティア「手のひらの会」が存在しており、現在は、協同して「矢祭もったいない文庫」を巡っての読み聞かせを行っている。今後は、2009 年 7 月に講談社から寄贈されたキャラバンカー（図 10）を活用して町内を巡りたいと金澤館長は話していた。

最後に、「矢祭もったいない図書館」（開館前を含む）の主な出来事をまとめると表 2 のようになる²¹⁾。

表2 「矢祭もったいない図書館」の主な出来事

年 月	主な事項
2005年12月	<ul style="list-style-type: none"> ・町民アンケートの結果、「町立図書館の早期開設」の要望が大多数に ・これを受け、町で図書館づくりの検討開始
2006年6月	<ul style="list-style-type: none"> ・福島市内の会合で町の職員が図書館づくりの取り組みについて講演。毎日新聞社福島支局長が全国に図書の寄贈を呼びかけてはどうかとの提案
2006年7月	<ul style="list-style-type: none"> ・武道館を地域開放型交流施設として図書館に改築する工事に着工 ・「パートナーシップで創りあげる新しい図書館づくり」検討会の開催
2006年8月	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日新聞が全国版で矢祭町への図書寄贈を呼びかける記事を掲載 ・「図書館開設準備委員会」を立ち上げ、寄贈図書の整理、分類作業等の開館準備を進める
2006年12月	<ul style="list-style-type: none"> ・開館準備終わり、「図書館開設準備委員会」解散
2007年1月	<ul style="list-style-type: none"> ・「図書館管理運営委員会」発足、開館後の図書館運営を担う ・図書館改築竣工 ・「矢祭もったいない図書館」開館
2007年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館報「図書館だより」創刊
2007年4月	<ul style="list-style-type: none"> ・貸出をカード（ブラウン）式からコンピュータ式に移行
2007年8月	<ul style="list-style-type: none"> ・寄贈図書の冊数が40万冊を超過したため、寄贈の受け入れ停止
2007年10月	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者延べ1万人超え ・「読書の町矢祭宣言」発表
2007年11月	<ul style="list-style-type: none"> ・町内25か所（現在は26か所）に「矢祭もったいない文庫」設置 ・「Library of the year 2007」にて優秀賞受賞
2008年2月	<ul style="list-style-type: none"> ・「矢祭もったいない図書館」開館1周年記念講演会開催（阿久津良成氏） ・視覚障害者のための拡大読書器など設置
2008年5月	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月第2土曜日「おはなしの日」開始 ・毎月第3土曜日「館長の科学はてな？教室」開始
2008年6月	<ul style="list-style-type: none"> ・町外利用者への遠隔地貸出宅配サービスを開始
2008年8月	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者延べ2万人超え
2008年10月	<ul style="list-style-type: none"> ・「矢祭もったいない文庫」開設1周年記念講演会開催（柳田邦男氏）
2009年1月	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害者のための簡易筆談器を設置
2009年2月	<ul style="list-style-type: none"> ・「矢祭もったいない図書館」開館1周年記念事業開催 ・「矢祭もったいない図書館のうた」制定
2009年6月	<ul style="list-style-type: none"> ・「子ども司書」講座開始
2009年7月	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者延べ3万人超え ・講談社よりキャラバンカー寄贈される

出典：矢祭もったいない図書館『平成21年度矢祭もったいない図書館要覧』、2009年、pp.3-5。及び、筆者の訪問調査時に入手した図書館作成の資料にもとづく。

3. 島根県海士町「島まるごと図書館」

3.1 海士町の沿革と現況

続いて、もうひとつの訪問調査地である島根県海士町について見ていきたい。海士町は、隠岐諸島にある。隠岐諸島は島前3島と島後島の4島から成るが、島前3島の1つである中ノ島に海士町はあり、1島1町の自治体である(図11)。島根半島からは約60kmの距離で、県庁所在地である松江市内の七類港や鳥取県の境港市から隠岐汽船が就航しており、高速船を利用すれば約2時間で着くことができる。海士町は、1904年に海士村として成立し、1969年に町制施行し現在に至っている。島の歴史は古く、承久の乱(1221年)後に後鳥羽上皇が配流された場所として知られている。

2009年10月現在の人口は2,373人²²⁾であり、1950年には6,986人いた

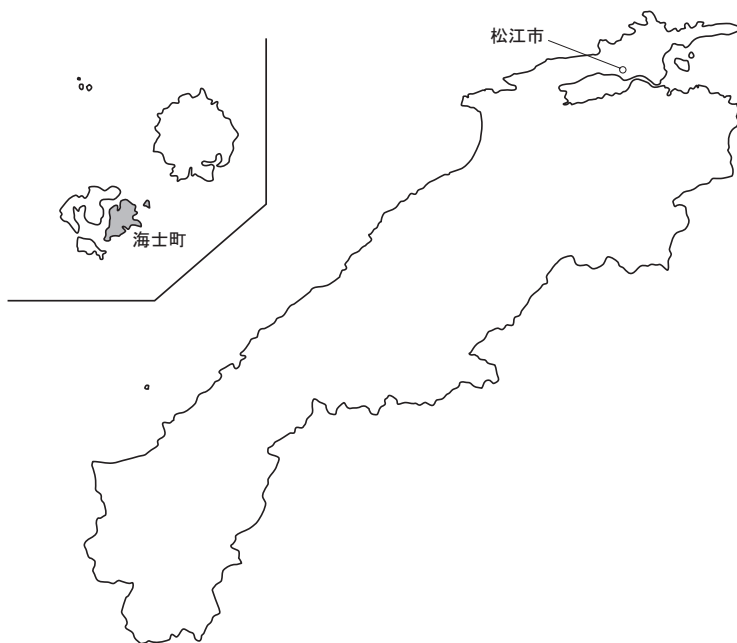


図11 島根県海士町の位置

人口は以降減少傾向が続いている²³⁾。さらに高齢化も著しく、人口の4割が65歳以上の高齢者となっている。このことが、町の主要産業である漁業、そして町政にも深刻な影響を与えた。高齢化や後継者不足から「海士町の漁業は衰退の一途を辿り、それに伴って町の収入も減って、町は財政破綻寸前の状態」²⁴⁾となってしまったのである。こうした状況に対して、2002年に町長に就任した山内道雄は、生き残りをかけさまざまな取り組みを行っている。

例えば、先の漁業の問題については、山内町長は「町が生きていくには、第一次産業の再生しかない」²⁵⁾と判断。2005年には水産加工会社「ふるさと海士」を設立し、魚介類の細胞を生きたまま凍らせることのできる最新冷凍装置「CAS」(Cell Alive System)を約1億円を投じて導入した。ホームページなどを通して全国に海産物の販路を拡げ、海外からも視察が来るようになった現在では、漁業の回復にも大きく寄与している²⁶⁾。このほかにも、建設会社の畜産業への参入を後押ししたり、低家賃の住宅を整備するなどして島外からの移住者の農業、漁業への新規参入を支援するなどの取り組みを行い、第一次産業の再生のみならず、過去4年間で約130人の移住者の呼び込みにも成功している²⁷⁾。

ところで、財政破綻寸前の状態にあった海士町にとって、上述したような取り組みの財源はどこから出たのであろうか。それは、行財政改革、主に、職員数の削減や給与カットなどで節約できた経費を充てたのであった。2008年度で町長が50%、町職員が8~30%、そして助役、教育委員、町議も40%、給与を削減している。これによって、町職員の給与金額は、全国の市町村のなかで最低水準となった²⁸⁾。町長自らが給与カットを行ったところ、それを見ていた課長クラスの職員が「自分たちの給与もカットしたい」と申し出て実現したのだという²⁹⁾。

海士町にも合併の話がなかったわけではない。2002年に島前3島にある海士町、西ノ島町、知夫村の3町村で合併の話合いが持たれる。しかし、山内町長は、離島同士の合併にメリットが見いだせないことや、3島はそれぞれ独自の歴史や文化を持っており、それを無視した合併には無理があることなどの理由から、合併には慎重な立場をとった³⁰⁾。また、「大勢として町民の意見も、合併反対であることが分かり」³¹⁾、山内町長は合併しないとい

う決断を下した。これは、苦渋の決断であったという。「合併をしないで単独町制を続けたとして、果たして海士町は生き残っていけるだろうか³²⁾」との思いもあったからである。「しかし、どの道、苦労は避けられないのならば、自分たちの力でできるだけのことをした方がいい」、「身を削ってでも、この島を守る。そして、この島で産業を作り育てる。簡単なことではないでしょうが、同じ苦労をするなら、他人の力に頼るのではなく、自分たちの足で歩いていった方がいい³³⁾」と考え、決断したのであった。

このほかの海士町での取り組みについては、山内の著書『離島発生き残るための10の戦略』(日本放送出版協会、2007年)に詳述されており、参考になる。

3.2 「島まるごと図書館」の構想と準備

海士町の「島まるごと図書館」とは、そういう名前の図書館施設があるわけではなく、「離島」であり“公立図書館”がないというまちの大きなハンディキャップを逆に活かし、学校図書館、地区公民館、港のターミナル、保健福祉センターなど人が多く集まる拠点をそれぞれ図書館分館と位置づけ、島全体をネットワーク化して一つの“図書館”と見立てるもの³⁴⁾であり、「高齢・過疎のまちにおいて誰もが等しく図書館サービスを受けることができるシステムの構築を目指し」ている³⁴⁾。「本館」に当たるのが海士町中央公民館図書室である。

この「島まるごと図書館」事業がスタートする以前の読書環境は、海士町中央公民館に図書室があったものの、蔵書冊数は1,500冊程度で休眠状態であり、また、各小、中学校の学校図書館も手つかずでほとんど利用されていない状態であった。さらに、町内に小さな書店が1店あるものの、雑誌メインで図書は注文しなければ手に入らない状況であったという³⁵⁾。

こうした読書環境を改善し、「持続可能な地域社会を目指し、人間力溢れる人づくり」を目標に掲げて2007年度からスタートしたのが「島まるごと図書館」事業である³⁶⁾。2007年度から2008年度にかけては文部科学省の「読む・調べる」習慣の確立に向けた実践研究事業を受託し、また、職員(司書、読書推進コーディネーター、図書館研修生)3人を任用した。こうして、

予算と人材を確保してスタートしたのである³⁷⁾。

この「島まるごと図書館」は2007年度にいきなり構想されたわけではなく、前年度までに伏線があった。海士町では、人口、特に若者の流出や後継者不足という地域課題に対して、地域で文化や産業を創りだせる人材の育成が必要との認識から、町の総合計画の柱のひとつに「人づくり」を位置づけた。この人づくりには、読書活動が重要であるとの意見が教育委員会の定例会などで出され、司書配置の予算を要望したり、図書館活動の先進地視察を行ったりしていたのである³⁸⁾。

事業がスタートしてまず着手したのは、「本館」である海士町中央公民館図書室や「分館」である各学校の学校図書館などの環境整備であった。2008年度にかけて、「本館」である海士町中央公民館図書室では、図書室スペースの拡大、図書の新規購入、古い図書の廃棄、蔵書検索用端末の整備、郷土資料コーナーの設置等を行った。また、港のターミナル、保健福祉センター、私立保育園、地区公民館の計7か所に書架と図書を配置し「分館」を開設した。同じく「分館」に位置づけている各学校の学校図書館は、子どもたちがゆっくり読書や学習できるように図書館内のレイアウトを抜本的に変更するとともに、図書の新規購入、古い図書の廃棄、図書の分類などを行った。さらに、「本館」、「分館」の蔵書のデータベース化を進め、相互貸借システムを導入した³⁹⁾。

3.3 「島まるごと図書館」の実際

「島まるごと図書館」は、海士町教育委員会のもとに教育長、小学校長、読み聞かせボランティアなどから成る「島まるごと図書館運営委員会」が組織され、運営されている。訪問調査でお話を伺った磯谷司書が事務局を務めている。2009年度の図書館業務担当者は4人となっている。また、2009年度の事業予算は、図書購入費が668,000円（海士町中央公民館図書室分のみ。学校図書館分は小、中学校合せて1,319,000円が別途措置）、人件費が3,326,000円（県費1,886,000円、町費1,440,000円）である。

上述したように、「島まるごと図書館」は、「本館」である海士町中央公民館図書室と「分館」である4つの学校図書館（県立高校1校を含む）、7つの

地区分館、そして「移動図書館」から成る図書館機能のネットワークである（図 12）。さらに、各館での役割分担を明確化し、「分館」である小学校の学校図書館は児童サービスを担う図書館、中学、高校の学校図書館はヤングアダルトサービスを担う図書館⁴⁰⁾、それ以外の「本館」、「分館」、「移動図書館」は赤ちゃんから高齢者までに幅広くサービスする図書館と位置づけ、図書館資料の分担収集や相互貸借を行うことで予算や蔵書の有効活用を図っている。「島まるごと図書館」は、図書館法に拠る公立図書館ではないが、公立図書館の機能を担うべく活動を展開しているといえる。

「本館」である海士町中央公民館図書室は、町役場の裏手にあり、中央公民館、教育委員会事務局との共用施設である（図 13）。図書室は入口正面にある 1 階部分（図 14）と 2 階部分があり、2 階部分がメインとなる（図 15～16）。内部は明るく落ち着いた雰囲気レイアウトされている。蔵書冊数は約 5,100 冊であり、事業が始まった 2007 年度以前に比べると 3,500 冊程度増えた。島根県立図書館からも半年に 1 度のペースで 600 冊程度を借り受けて町民の利用に供している。さらなる蔵書の増加に対応するために、現在、中央公民館の裏手に、新たに図書室を増築する計画が進められている。蔵書構成では、9 類（文学）が中心となっている。

「分館」は、学校図書館 4 か所、地区公民館等 7 か所に置かれている。前者としては、海士町立海士小学校図書館（図 17）、海士町立福井小学校図書館（図 18）、海士町立海士中学校図書館（図 19）、島根県立隠岐島前高等学校図書館（図 20）がある。蔵書冊数は、海士小学校約 3,000 冊、福井小学校約 3,000 冊、海士中学校約 4,000 冊、隠岐島前高等学校約 3,500 冊である。このほか、島根県立図書館からは半年に 1 度のペースで両小学校に 150 冊ずつ、中学校に 50 冊程度を借り受けて提供している。両小学校は以前はいずれも学校図書館でありながら会議室として使われていたところを学校図書館専用リニューアルした。福井小学校では 2008 年度から「図書館・情報活用学習年間計画」を学年別に策定し、図書館を活用した学習活動が計画的に展開され始めている。中学、高校も学校図書館をリニューアルし、読書や学習活動に活用する環境が整いつつある。後者としては、菱浦地区公民館、東地区公民館（図 21）、知々井会館、岬文化センター、キンニャモニャセンター



図 13 海士町中央公民館の入口



図 14 海士町中央公民館図書室（1階部分）



図 15 海士町中央公民館図書室（2階部分入口）



図 16 海士町中央公民館図書室（2階部分内部）



図 17 海士町立海士小学校図書館



図 18 海士町立福井小学校図書館



図 19 海士町立海士中学校図書館



図 20 島根県立隠岐島前高等学校図書館



図 21 東地区公民館図書コーナー

(図 22)、保健福祉センターひまわり、私立けいしょう保育園がある。このうち、キンチャモチャセンターとは、海士町の玄関口である菱浦港のターミナルセンターのことである。いずれも、蔵書冊数では多くても数百冊程度であるが、定期的に蔵書の入替えを行っているほか、県立図書館による借り受け図書の配本や、地区の住民による図書の寄贈がなされているところもある。県立高校や私立保育園を「分館」として位置づけていることから、まさに、島ぐるみ、「島まるごと」の事業でることが窺える。

このほか、「移動図書館」のサービスがある。「本館」や「分館」まで足を運べない高齢者を主なサービス対象として、保健師による町内 14 の地区公民館での健康相談の日に合わせて、全地区公民館に移動図書館を巡回させている。巡回頻度は 2 か月に 1 回の割合（したがって、貸出期間も次の巡回日



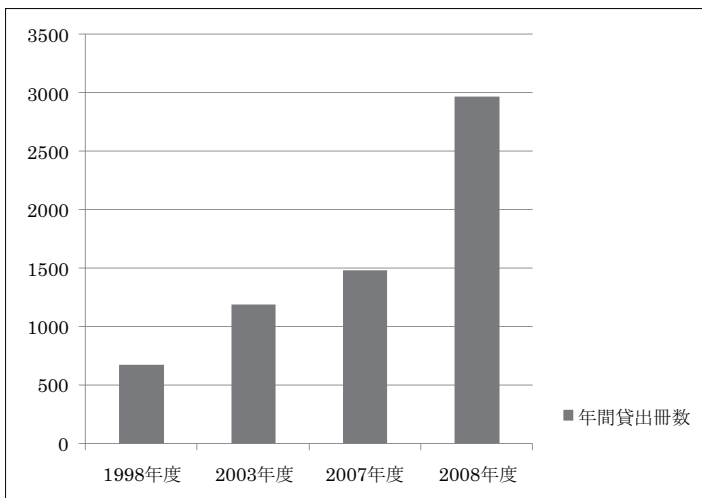
図 22 キンニャモニャセンター図書コーナー

までの 2 か月) である。1 か所当たりの利用者は平均 4～5 人である。担当職員が利用者と直接やりとりし、その地区の利用者のニーズに合った図書を持参するようにしているという。

「本館」である海士町中央公民館図書室は、年末年始を除く毎日、午前 8 時半から午後 5 時半まで開館している。貸出冊数と期間は、1 人 10 冊まで 1 か月（新刊図書のみ 2 週間）となっている（町外の人にも貸出している）。司書は学校図書館等も受け持っているため常駐していない。そのため、貸出手続きは、利用者自身が貸出カードに記入して借りていく方式を採用している。手続きしないで持ち出す人はいないのかと筆者は疑問を持ったが、磯谷司書は「町民を信頼しています」とのことであった。「分館」は、その施設の開館時間によって利用できる時間は変わってくるが、利用者自身が記入するという貸出手続きの方法は同様である。希望する町民には独自に作成した『読書手帖』、『どくしょてちょう』（子ども用）を配布している。これは、利用者各自で読んだ図書を記録し、読書履歴を振り返ることで、読書への親しみをもってもらうことを意図しての取り組みである。「本館」と学校図書館を除く「分

館」、「移動図書館」を合わせた年間貸出冊数の推移を図 23 に示す。「分館」の設置などサービスポイントが増えたことも関係しているようが「島まるごと図書館」がスタートした 2007 年度以降、貸出が大きく伸びている。学校図書館の貸出状況は、海士小学校（児童数 46 人）を例に見ると、2007 年度が年間 347 冊、2008 年度が年間 2,314 冊であり、学校図書館の環境整備に伴って貸出も大幅に増加したことが窺われる。

上述した以外の主だった図書館サービス、図書館活動としては、(1) ブックスタート活動、(2) おはなし会の開催、(3) 小学校での読み聞かせイベントの開催、(4) 本を通じた読書交流イベントの開催、(5) 本に親しむための一般向け講演会、(6) PR 冊子『この島の、本棚から。』の発行、などを挙げることができる。このうち、本を通じた読書交流イベントは、菱浦港の蔵を会場に、島内外の 18 歳以上の読書好きな人が「おすすめの本」などを語り合うとともに、島外の参加者には隠岐観光を含む宿泊イベントとして観光協会と連携して開催された。



出典：筆者の訪問調査時に入手した図書館貸出統計資料による

図 23 海士町（学校図書館を除く）における年間貸出冊数の推移

他機関等との関わりとしては、島根県立図書館から上述したように定期的に図書を借り受けており、さらに、同館の職員によるアドバイスを受けている。また、町内の両小学校には1グループずつ読み聞かせのボランティアグループがあり、連携を図っている。ボランティア人材の育成をねらいとした「ボランティア視察研修会」などの研修会を開催している⁴¹⁾。

4. 考察とまとめ

以上、福島県矢祭町の「矢祭もったいない図書館」と島根県海士町の「島まるごと図書館」の実際を述べてきたが、それぞれには経営上どのような可能性があり、一方で、課題があるのか考察したい。

4.1 「矢祭もったいない図書館」の可能性と課題

まず、「矢祭もったいない図書館」の可能性として、ここでは次の2点を指摘したい。

- (1) 町当局及び町民の図書館に寄せる強い関心
- (2) 観光資源としての「矢祭もったいない図書館」

(1) は、図書館がその地方自治体のなかで存在感を高め、発展していくためには欠かせない。図書館に無関心な地方自治体も多いなかであって、非常に重要である。そして、強い関心の表れとして、町民自身が運営委員会を組織してボランティア同然で運営を担っているという点も矢祭町ならではの点であろう。もちろん、いつまでもこの関心を維持し続けることができる保障はどこにもない。したがって、町当局及び町民の図書館に寄せる関心を持続させ、図書館をさらなる発展に導かせるために、矢祭町の事情や特性をふまえた長期的な図書館の経営戦略、ビジョンの立案が不可欠である。

(2) は、その経営戦略、ビジョンの1つの視座となり得るものと思われる。「矢祭もったいない図書館」は矢祭町の観光資源となり得るということである。このことは、山本順一がすでに指摘している⁴²⁾。すでに述べたように、

町外登録者が全登録者の3分の1を占めている。しかも、その多くは、全国各地の寄贈者である。図書館がイベント（例えば、「ブック・ツーリズム」⁴³⁾など）を定期的に企画することによって寄贈者をはじめとした多くの町外の人に来館、来町してもらう機会づくりをすることも一案である。多くの図書を矢祭町に呼び寄せたように、今度は図書館が中心となって多くの人を矢祭町に呼び寄せることも可能であろう。図書館を観光資源とする町おこしがあってもいい。多くの町外の人に来てもらうことができれば、町自体が潤うことにもつながる。そして、町が潤えば、図書館への投資も増えるという、正の循環を生み出すことにつながる可能性さえある。

一方で、課題として、ここでは次の2点を指摘したい。

(1) 寄贈頼みの蔵書構築

(2) 運営の専門性の担保

(1) は、この図書館が開館した時点から内包している課題といえる。寄贈図書の受け入れによって構築された蔵書は、利用者のニーズにもとづき図書館が自ら選択、収集したものではない。そのため、開架書架と閉架書庫の蔵書を定期的に入れ替えるなどの工夫をするにしても、利用者のニーズを充たし続けることは難しいのではないかと思われる。金澤館長も、新刊の図書をどう入れていくかが大きな課題であると話していたが、図書購入に使える予算がないため、結局は寄贈に頼らざるを得ない現状にある。しかし、長期的に考えれば、一定程度の図書購入予算を確保し、利用者のニーズを反映した蔵書構築を行う方法の検討は避けられないだろう。

(2) に関して、可能性の(1)のところで「町民自身が運営委員会を組織してボランティア同然で運営を担っているという点も矢祭町ならではの」と述べたが、ここにも課題が内包されている。具体的には、専門性の問題である。現在図書館業務を担っている14人の運営委員会委員のうち、司書の資格を有するは1人に過ぎない。もちろん、現在でも各種の研修を行ってはいるが、体系的な図書館情報学教育を受けた人材の増員が望まれる。そのためには、現委員に司書資格取得を奨励する取り組みや、資格取得者に見合う賃金の検

討も長期的には必要と思われる。

4.2 「島まるごと図書館」の可能性と課題

次に、「島まるごと図書館」の可能性として、ここでは次の3点を指摘したい。

- (1) 「島まるごと」という発想
- (2) ネットワークを結ぶ司書の存在
- (3) 観光資源としての「島まるごと図書館」

(1) の「島まるごと」という発想は海士町ならではのもの⁴⁴⁾であり、現在そしてこれからのにとっても非常に重要であると思われる。公共図書館に学校図書館を加えた地方自治体内の図書館ネットワーク（総合目録や相互貸借システム）は各地に散見されるが、それらのネットワークでは公共図書館間には本館一分館関係はあるにしても、学校図書館はあくまでもネットワークに参加している別組織（公共図書館からは独立した存在）という扱いである（教育委員会の管轄も公共図書館と学校図書館は別である）。ところが、海士町の「島まるごと図書館」では、学校図書館もその「分館」と位置づけている。つまり、この事業では、島内にある各図書館、図書室、図書コーナーはすべて「島まるごと図書館」に属しているわけである。しかも、社会教育と学校教育、県立高校や私立保育園などといった管轄の違いを超えての一体的な取り組みである。それゆえ、公共、学校の別なく、一気に環境整備を進めることができる。

(2) に関して、「島まるごと図書館」のネットワークにとって核になっているのは、コンピュータではない。司書の存在である。海士町の優れたところは、事業のスタートに合わせて専門職である司書等の職員を任用したことである。そして、この事業の今後の発展にとっても司書の力は欠かせない。

(3) は、「矢祭もったいない図書館」でも述べたことと共通する。実は、すでに3.3で紹介したように、島内外の人による本を通じた読書交流イベントを開催しているが、これは観光協会と連携して取り組まれたイベントで

あった。海士町としては、今後も、「島まるごと図書館」の読書環境を利用して、島でゆったり過ごしてもらうことを観光資源として売り出し、観光やまちの振興、島内外の交流の促進につなげる」⁴⁵⁾ 取り組みを進めたい意向のようである。企画次第では、多くの人を島に呼び込むことも十分に可能であろう。

一方で、課題として、ここでは次の2点を指摘したい。

- (1) 予算の維持
- (2) 職員の充実

(1) に関して、事業をスタートした2007年度から2008年度にかけては文部科学省の委託事業であったため受託費があった。今後も、町財政が厳しいため、こうした国や県などの委託事業や補助事業に応募するなどして財源確保を目指す方針のようである。しかし、応募したからといって受託や補助が受けられるとは限らない。一定の予算を維持するには、やはり町費の確保が必要である。そのためには、町財政の安定化を図るとともに、町民や町議会の「島まるごと図書館」に対する理解をさらに高めていく必要がある。

(2) について、この事業の核になっているのは司書の存在であると述べたが、事業のさらなる充実を図るためには、町財政の状況を踏まえながら担当職員の増員を検討する必要がある。やはり、「本館」である海士町中央公民館図書室には常駐職員がほしいと訪問して感じた。

4.3 全体の考察

両ケースは、いずれも全国的に注目を集めている。小規模な地方自治体や、今まで図書館を設けていなかった地方自治体が図書館に関心を持つようになるのであれば、大いに歓迎すべきことではないかと筆者は思う。しかしながら、両ケースに対する批判的な見方も少なくない。寄贈だけで図書館を作る地方自治体が他にも出てくるかもしれないなど、両ケースと同じ手法が他の地方自治体へ波及することを心配する意見も聞かれる。なるほど、図書館とはこうあるべきだという、あるべき姿が定まっている人からすれば、両ケー

スとも受け入れ難いものに映るのかもしれない。

しかし、この心配は杞憂であろう。実際に訪れてみて、筆者は両ケースの手法を他の地方自治体で真似し、実現にまで至るのはかなり難しいだろうという印象を持った。「矢祭もったいない図書館」は矢祭町だから、「島まるごと図書館」は海士町だからできたことなのである。つまり、矢祭町も海士町もともに、(1) 合併せず自立していくことを選んだ小規模自治体であり、(2) 町当局と町民が財政状況などの町のおかれた現状に対する危機意識を共有できており、しかも、(3) 図書館が欲しいというニーズが出された時に、その町の事情や特性を踏まえた上で知恵を絞って生み出されたもの、それが「矢祭もったいない図書館」や「島まるごと図書館」なのである。この3つをいづれも満たさなければ、真似しようとしてもうまくいかないだろう。相当に高いハードルである。

実際に訪れてみて、もうひとつ強く感じたことがある。それは、国による山村や離島のための独自の図書館振興施策の必要性である。都市部の図書館を「あるべき姿」の前提として考えても、こうした地域の図書館振興は難しい。地域ごとの違いがあまりにも大きすぎるからだ。離島に関して言えば、島ごとに事情や特性は違うといっても過言ではないだろう。こうした事情や特性を踏まえた図書館づくりを可能にするにはどうしたらよいのか。調査研究が急がれる。

最後に、ご多忙のなか、聞き取りにご協力いただいた皆さまに改めて感謝を申し上げる。

[付記]

本稿は、人文科学研究所共同研究「社会の変革期における情報環境のあり方に関する研究」（代表：荻原幸子 2007年～2009年）の研究成果の一部である。

註

- 1) 野口武悟「岐路に立つ地方自治体と図書館経営（Ⅰ）—北海道夕張市の場合—」『人文科学年報』第39号，2009年，pp.19-41.
- 2) 矢祭町のホームページ (<http://www.town.yamatsuri.fukushima.jp>) 掲載の「矢祭町の概要」による（2010年1月1日参照）.
- 3) 前掲2) に同じ.
- 4) 矢祭町のホームページ (<http://www.town.yamatsuri.fukushima.jp>) 掲載の「市町村合併をしない矢祭町宣言」による（2009年12月28日参照）.
- 5) 沖縄タイムス市町村合併取材班「自治のあした—市町村合併リポート（30） 第3部先進地：福島県矢祭町（2）」『沖縄タイムス』2003年3月12日付朝刊.
- 6) 中沢孝之「矢祭もつたいない図書館を訪ねて」『図書館評論』第48号，2007年，pp.16-17.
- 7) 木村英昭「町民雇い窓口業務委託 「第2役場」新設へ」『朝日新聞』2009年2月5日付朝刊.
- 8) 無署名「「第2役場」構想反発で先送りに」『朝日新聞』2009年2月28日付朝刊.
- 9) 矢祭町のホームページ (<http://www.town.yamatsuri.fukushima.jp>) 掲載の「町民とともに立たん」による（2009年12月28日参照）.
- 10) 前掲6)，p.17.
- 11) 矢祭もつたいない図書館『平成21年度矢祭もつたいない図書館要覧』，2009年，p.3.
- 12) 齊藤守保「報告・矢祭町から—「矢祭もつたいない図書館」開館す!!」『みんなの図書館』第362号，2007年，p.57. なお、著者の齊藤は、開設準備に尽力し、初代館長を務めた人物である。2008年9月に逝去されており、聞き取りはかなわなかった。
- 13) 前掲12)，p.58.
- 14) 前掲11) に同じ.
- 15) 前掲11) に同じ.
- 16) 前掲12)，p.58.
- 17) 前掲11)，p.4.
- 18) 前掲12)，pp.58-59.
- 19) 前掲12)，p.59.
- 20) 株式会社ソフテック社製の図書館システムで、主に、小規模図書館で導入されている。「矢祭もつたいない図書館」では、このシステムで貸出、返却、蔵書検索を行っている。
- 21) 本節に記載の内容(事実やデータなど)は、筆者の訪問調査による聞き取りの内容、及び調査時に入手した、矢祭もつたいない図書館『平成21年度矢祭もつたいない図書館要覧』，2009年，18p. などの図書館作成の資料にもとづく。
- 22) 海士町役場『広報海士』第423号，2009年，p.1.
- 23) 海士町のホームページ (<http://www.town.ama.shimane.jp>) 掲載の「海士町について」による（2009年12月30日参照）.
- 24) テレビ東京報道部編『日経スペシャルガイアの夜明けニッポンを救え』日本経済新聞出版社，2009年，p.79.
- 25) 前掲24) に同じ.

-
- 26) 前掲 24), pp.77-83.
 - 27) 天野剛志「列島発! 島根県・海士町 過疎の島に移住 130 人」『朝日新聞』2008 年 6 月 22 日付朝刊.
 - 28) 前掲 27) に同じ.
 - 29) 山内道雄『離島発生き残りのための 10 の戦略』日本放送出版協会, 2007 年, pp.85-88.
 - 30) 前掲 29), pp.31-45.
 - 31) 前掲 29), p.42.
 - 32) 前掲 29), p.42.
 - 33) 前掲 29), p.43.
 - 34) 筆者の訪問調査時に入手した海士町教育委員会作成の「平成 20 年度地域の図書館サービス充実支援事業」に関する資料による。
 - 35) 磯谷奈緒子「隠岐島・海士町発! 島まるごと図書館構想」『みんなの図書館』第 377 号, 2008 年, p.33. 及び筆者の訪問調査時に入手した海士町教育委員会作成の「平成 20 年度地域の図書館サービス充実支援事業」に関する資料による。
 - 36) 磯谷奈緒子「隠岐島・海士町発! 島まるごと図書館構想」『みんなの図書館』第 377 号, 2008 年, p.33.
 - 37) 前掲 34) に同じ.
 - 38) 筆者の訪問調査による聞き取りの内容、及び調査時に入手した海士町教育委員会作成の「平成 20 年度地域の図書館サービス充実支援事業」に関する資料による。
 - 39) 前掲 35) に同じ.
 - 40) なお、同時に、小、中、高等学校の学校図書館とも、学校図書館本来の「学習情報センター」、「読書センター」としての機能を高めることも目指しており、図書館活用教育を推進している。
 - 41) 本節に記載の内容(事実やデータなど)は、筆者の訪問調査による聞き取りの内容、及び調査時に入手した海士町教育委員会作成の「平成 20 年度地域の図書館サービス充実支援事業」に関する資料などにもとづく。
 - 42) 山本順一「自治体の経営戦略と図書館のあり方—福島県矢祭町の事例を通じて考える」『図書館評論』第 48 号, 2007 年, pp.7-9.
 - 43) 「ブック・ツーリズム」については、わが国では長野県伊那市高遠町での開催事例 (<http://takatobookfestival.org/index.html>) がある (2010 年 1 月 1 日参照).
 - 44) 「島まるごと図書館」の「島まるごと」という発想自体は、山内町長による「島まるごとデバートメント」構想(島が持っている宝物をまるごと売り出そうという構想)に影響されたようである。
 - 45) 前掲 34) に同じ.